

v. 悪石島での取り組み

悪石島実習生 森本孝伸

はじめに

前年秋、トカラ研修の構想を初めて聞かされた時、まず正直なところ、自分の頭の中の地図では、すぐに研修地の場所をイメージできなかった。私にとっては、トカラ列島のみならず、鹿児島県そのものが未踏の地であった。

「唯一の交通手段は週2往復の村営船のみ」「海が荒れたら島から出られない」「全ての島の学校が小・中学校の併設校である」「いずれも極端な少人数校で、小・中あわせても10名前後の在籍数である」「列島の中には、戦後、無人島化した島がある」など、現地の状況を聴けば聴くほど、次第にどこか夢中になって、現地の教育体制をイメージしようとしている自分がいた。そして素直な気持ちで、「そのような教育環境のもとで一体どのような学校教育が行われているのか、現地校の実態をこの目で見てみたい」と考えるようになった。このことは、いつの日か教壇に立つことを夢見て日々階段を昇っている教員養成系大学の学生として、ごく自然な気持ちであったと思う。

また自分自身が受けてきた教育との違いに、ある意味でのショックを受けていた側面もあった。私は兵庫県の淡路島で幼少期を過ごしたが、悪石島をはじめとするトカラ列島の関連情報にふれるにつれて、同じ離島でも、教育や日常生活の利便性等あらゆるものが全く違うことを感じた。その後、勉強会が発足し、離島の地誌や少人数教育及びへき地教育の実態について、週一回の会合で学ぶようになったが、机上の学習だけでは必ずしも十分なイメージはつかめず、時間の経過と共に、現地での体験実習に対する思いがますます膨らんでいった。

この勉強会に参加する際に、私は「へき地教育は教育の原点だ」という仮説を立てた。それは、豊かな自然に抱かれた環境でごく少数の子どもと、放課後も含めて長時間にわたって向き合えるのではないかと考えたからである。そして児童・生徒の一人ひとりに目が行き届き、個に応じた指導ができるのではないかと考えたからである。全てがこのような理想郷的な雰囲気ではないであろうが、私は現地に赴いて、この仮説を体当たりで検証したいと考えた。加えて悪石島には、仮面神ボゼや対馬丸沈没の故事（1944年）など、トカラの他の島々には無い、独自の伝統及び歴史が存在する。「社会科に軸足を置く」小学校教員をめざす者として、地誌や民俗学の立場をとりつつ歴史・平和学習の視点から、これらの教材化を試みたいと感じた。その教材開発をするにあたって、是非とも地元の方々からヒアリングをさせて頂き、その作業を通して、悪石島のことを体験的に知りたいと考えた。

1. 悪石島について



御岳



図 1. 悪石島の地図

出典: 十島村役場ウェブページ

<http://www1.tokara.jp/contents/profile/akuseki.html>

(1) 悪石島の自然とくらし

悪石島は、周囲 12.64km、面積 7.49 km²、人口 77 人（2006.7 末）、最高点は御岳の 584m である。

悪石島には、仮面神に象徴される「神々の島」の行事がいろいろある。

その代表がボゼ祭りであり、旧暦の 7 月 16 日に催される。これは盂蘭盆会※の最後に行われる行事であり、太鼓の合図で仮面神「ボゼ」が登場すると一座は大騒ぎ（大盛況）になり、ボゼの「マラ棒」の先についた赤土をつけられた人には豊饒と繁栄が訪れるという、原始的な生命の神秘を感じさせる祭りである。また悪石島の盆踊りは県指定の無形民俗文化財になっており、「俵おどり」や「魚釣り踊り」「花踊り」など 7 つの盆踊りが伝わっている。

また島内には、太平洋戦争の後半期の 1944 年 8 月 22 日に、米艦の魚雷を受けて沈没した対馬丸の慰霊碑がある。この船は沖縄から鹿児島に向かう学童疎開船として、一般・学童合わせて 1788 名が乗船していたが、このうち 1418 人が没した。悪石島はこの沈没地点から最も近い島である。この慰霊碑は戦後の 1962 年に、当時の悪石島小中学校の学校長の発案で建てられた。今もこの慰霊碑では、毎月第三土曜日の朝 8 時 25 分から、悪石島小中学校の子供たちと教職員、そして島民による清掃活動が続けられており、戦没者への畏敬の念を込めて、大切に守られている。

もう一つ、悪石島及びトカラ列島を有名にしている適時的な事象がある。皆既日食の観測である。特に悪石島は、観測地点として最も優れているのである。来たる 2009 年 7 月 22 日（水）午前 11 時前ころからの観測であるが、このとき皆既日食を観測することがで

※ 盂蘭盆会（うらぼんえ）とは、安居（あんご）の最後の日、7 月 15 日（旧暦）を盂蘭盆とよんで、父母や祖霊を供養し、倒懸（とうけん）の苦を救うという行事である。（出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』）

きる屋久島－奄美大島間のうち（部分日食の観測は他地方でも可能）、悪石島は皆既継続時間が6分30秒という長時間に及ぶ。これは21世紀最大級の皆既日食である。

島民は、全員が顔見知りであることは当然だが、「有川」姓が約7割を占めているので、必然的に姓ではなく、名前と呼ぶ習慣がある。島民の生活空間は、決して広くはない島の中でも、さらに限定されている。第一次産業の従事者を除いて、基本的に集落、定期船が接岸する「やすら浜」港、温泉場が、ほぼ日常の生活空間である。また平地が極めて少ないため、自家用車等での移動が必須になってくる。一緒に食事をとることや、温泉場に行くことが多く、島民相互の助け合いの精神が根付いており、私の目には、島民間の人間関係はとても温かく見えた。



天然プール



朝礼にて初対面

(2) 悪石島小中学校の教育体制

同校は、めざす児童・生徒像として、「明るく思いやりのある子ども」「よく考え進んで学習する子ども」「最後までやり抜くやる気のある子ども」を掲げている。この実現のために、学校と地域が一体となって努力している。

なお子どもたちは中学校卒業後、全員が悪石島を離れ、鹿児島県本土の高校へ進学する。

在籍数は9名（小5名、中4名）である。全9名中、山海留学生は0名、教員子弟は1名である。なお前年度の在籍数は、10名であった。

学級編成は、小二・三（2名・1名）は複式、小五（2名）は単式である。中一（2名）と中二（1名）は同一学級であり、同じ授業を受けている。中三（1名）は、体育・音楽・技術・家庭科は下級生と一緒に受けていたが、他の授業は中三生のみで行っていた。

校舎は平屋造りで、小学校と中学校の校舎は棟が分かれており、さらにこれらとは別棟に「特別活動室」がある。この部屋は、図書室・音楽室・ランチルーム等を兼用していた。またこれとは別に体育館があり、体育の授業は、（少なくとも私の実習期間中は）校庭よりも体育館をよく使っていた。

次年度は2名が、小学校に入学する予定である。これと合わせて未就学児童は10名程度存在するので、ここ数年間は廃校の懸念はない。しかしこのうち4名は教師の子どもである。将来的に学校存続が安泰であるとはいえない。

2. オリジナル授業

(1) 学習指導案

社会科地理分野 学習指導案



指導者： 森 本 孝 伸
 学年・学級： 中学校第3学年（男子1名）
 場所： 悪石島中学校第3学年教室
 日時： 平成18年9月14日（木）第5校時

1. 単元名 「私の町紹介—姫路市」

2. 単元設定の理由

(1) 教材観

『学習指導要領』（中学校社会科）の地理的分野の「内容」に定められた「(2) 地域の規模に応じた調査 ア身近な地域」の「生徒が生活している土地に対する理解と関心を深めさせるとともに、市町村規模の地域的特色をとらえる視点や方法、地理的なまとめ方や発表の方法の基礎を身に付けさせる」※実践を行う上で、以下の題材を用いることが有効ではないかと考えた。

兵庫県姫路市は、授業担当者が若年期を過ぎた町である。姫路市には、世界遺産に登録されている姫路城や映画の舞台となった書写山がある。地理的・歴史的にも価値の高い建造物や自然がある授業者の故郷を紹介することで、生徒が自分の生活空間である地域にも改めて目を向け、再認識することができる。そうすることで、悪石島に対する理解をさらに深めさせるとともに、市町村規模の地域的特色を捉える視点や方法、図や地図を用いたまとめ方、発表する方法を身につけさせたい。

また鹿児島県の離島の中学生にとって、TV等の媒体で関西人の姿を見る機会はあるとはいえ、直接、関西人と接する機会は決して多くはないはずである。そのような「近畿地方」の事象を学ぶことによって、故郷から遠く離れた地域に対する関心を高める契機としたい。

(2) 生徒観

本単元を学習するにあたり生徒の実態を把握するため、アンケートによる事前調査を行った（資料1）。調査から生徒は、悪石島における当年のボゼ祭りに参加している。また島内の名所や主産業についてもよく認識しており、「人形岩」や「まる石」といった、ガイドマップには載っていないような所まで知っていた。しかし、本土で城郭を見た経験は無く、兵庫県に行っ

※ 文部科学省『中学校学習指導要領（平成10年12月）解説—社会編—』（平成11年9月、平成16年5月一部補訂）の42～45頁。

た経験も無かった。つまり島外についての経験的知識は乏しいといえる。本単元の「姫路市」については、これまでほとんど知る機会が無かったと思われる。

本生徒は明朗で、学校のリーダー的な存在であり、物事に積極的である。一方で現時点において、社会事象に対する興味は必ずしも高くはないようである。また、これまで他の地域の人々や文化にふれた機会は限られていたようである。しかし中学校を卒業すると、島を離れて新しい環境で生活を送る現実がある。そこで、姫路市を題材とした授業を通して、兵庫県に対する興味をさらに伸ばし、他地方の文化にふれる契機としたい。

- ①お城を見たことがありますか？ どちらかに○をつけてください。
- ②今年のボゼ祭りに参加しましたか？ どちらかに○をつけてください。
- ③ボゼ祭りの内容を説明できますか？ どちらかに○をつけてください。
- ④悪石島の主な産業がいえませんか？ どちらかに○をつけてください。
- ⑤悪石島の名所・観光スポットがいえませんか？ どちらかに○をつけてください。
- ⑥またその名所・観光スポットを書いて下さい。
(④でいいえと答えた方は、白紙をお願いします。)
- ⑦今まで行ったことのある都道府県はどこですか？ すべて書いて下さい。

資料 1. アンケート（9月の第2週目に実施）

（3）指導観

指導にあたっては、姫路市について発表しながら、悪石島と姫路市を比べ、興味・関心を持たせながら授業を展開する。生徒には悪石島にしかない魅力や伝統文化を再認識させ、郷土愛を育むことができるようにしたい。その手立てとして、身近な地域社会とのつながりを「祭り」という文化の中で意識させ、生徒自身が地域社会の一員であることを認識できるようにする。また、当該生徒に、郷里の島を今以上に好きになってもらいたいという願いが念頭にある。

使用する教材は、授業担当が兵庫県から持ち込んだ自作のビデオや写真などのビジュアル資料が中心である。これらを駆使しながら異郷の地に対する具体的なイメージを持たせ、翻って同じように「もし自らの郷土の島を紹介する場合は、何をどのように採り上げたらよいか」という発想を持たせ、郷土に対する思いを深めさせたい。以上の理由で、この単元を設定した。

3. 本時の実際

(1) 本時の目標

● [関心・意欲・態度]

自分の知らない都市について興味・関心を持たせると同時に、悪石島の良さを再確認させ、郷土に対する愛情を育てる。

● [思考・判断]

郷里の悪石島と、未踏の姫路市の地理的・歴史的・文化的な特性を比較しながら、双方の相違点を考察させる。

● [技能・表現]

自分の郷里である悪石島について発表させる。

● [知識・理解]

地域の祭りから、伝統文化や地域交流の大切さを認識させる。

(2) 指導過程

	学習活動	教師の働きかけ・主な発問	学習内容と情報の提示
導入 10分	<ul style="list-style-type: none"> ・姫路の祭りを認識する。 ・姫路の祭りの由来を理解する。 ・悪石島と姫路市の紹介をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・姫路の祭りを写真とビデオで紹介し、祭りの感想を発表させる。 ・姫路の祭りの由来を説明する 	<ul style="list-style-type: none"> ・板書で確認する。 ・写真（城祭り） ・写真（灘のけんか祭り） ・ビデオ（灘のけんか祭り）
	祭りの意義ってなんだろう		
展開 33分	<ul style="list-style-type: none"> ・人口や面積の違いを悪石島と比較し発表する。（6分） ・産業の違いについて悪石島と姫路を比較し発表する。（6分） ・観光スポット・名所を悪石島と姫路を比較し発表する。（10分） ・悪石島のボゼまつりの内容と由来を発表する。（4分） ・祭りの意義を考える。（7分） 	<ul style="list-style-type: none"> ・人口や面積の違いを、グラフで確認させる。 ・自分の保護者の職業を頼りに、悪石島の産業を予想させる。 ・教師が観光スポットである姫路城・書写山を写真や具体物を使い悪石島の観光スポットを紹介する。 ・悪石島のボゼについて内容や由来を説明してもらう。 ・なぜ毎年祭りをしているんだろうね？ 	<ul style="list-style-type: none"> ・グラフを黒板に書き人口や面積に違いを確認する。 ・第1～3次産業について確認する。 ・写真（姫路城） ・写真（書写山） ・DVD ・祭りの参加者（キーワード） ・伝統文化・地域交流
まとめ 7分	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の感想を述べる。 ・自分たちが生まれ育った土地を大切にすることを改めて感じる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・郷土を愛して、自信をもって自慢して欲しいと伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ふりかえり活動（口頭による確認） ・自らの体験を語る。

(3) 評価

- 自分たちがこれまでに知らなかった土地について興味・関心を持つと同時に、悪石島の良さを再確認し、郷土に対する思いを深められたか。
- 郷里と未踏地の地理的・歴史的・文化的な違いを考察することができたか。
- 自分の郷里である悪石島について、自分の言葉で発表することができたか。
- 地域の祭りを通して、伝統文化や地域交流の大切さを認識できたか。



授業風景



運動会の全体練習

(2) 実践報告

まず授業の結果と反省点について述べる。

「私の町・姫路市」という教材で、授業担当者が青春時代を過ごした姫路市を紹介しながら、生徒の住む悪石島を紹介してもらう形で、自らの郷里に対する思いを認識してもらおうと考えた。姫路市を紹介するにあたって、その内容を地理、経済、歴史、名産と区分して整然と伝えようと考えていたが、必ずしもこちらが想定していた通りには進まなかった。また本時の教育目標を達成するために、実習校の最高の特性を活かした「個に応じた指導」ができる環境にあったにも関わらず、結果として教師主体の授業展開になってしまっていた。本授業において、教師と生徒はまさに「一対一」の関係にあり、実習前に個人的に思い描いていた離島の小規模校の理想郷的な情景そのものであったが、実際は黒板を介して当該生徒との真剣な人間関係構築の場であった。時に、発問と解答のやりとりが上手にかみ合わないことがあり、現実問題として大勢を相手にする一斉授業とは勝手が異なり、意外に難儀であった。

反省点は、ただ一人の受講者である生徒の迷いに、即座に対応できなかったことである。あらかじめ生徒には、授業担当者が自分の地域を調べていたように、生徒自身に調べる時間を与える必要があった。また、生徒の迷いを上手に活用しながら、知識の輪を広げていく授業技術を身につけなくてはならないと反省した。授業時間中の「修正力」は、豊富な知識量に裏打ちされ、それをいつでも自らの引き出しから取り出すことのできるスキルであるということを、痛切に感じた。授業担当者は本授業を通して、授業スキルが未だ発展途上の段階にあることを冷静に反省した。

3. 研修内容

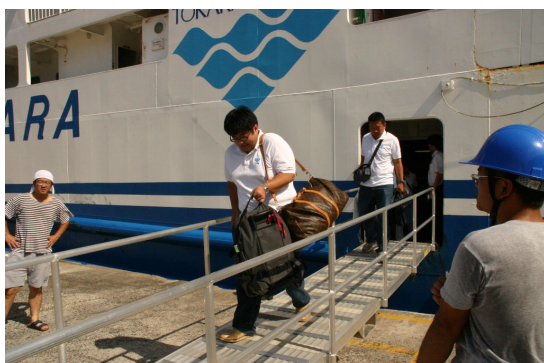
(1) 研修内容

中学校社会科で計3時間の授業実践を行い、主に中学校を中心に研修した。研修に取り組むにあたり、まず始めにオリジナル授業に向けてイメージを膨らませる必要があった。そこで授業見学の際には、複式や少人数での教授方法について、教師がどのように生徒に働きかけているのか、教師の視点から観察した。また、生徒の実態を把握することや、コミュニケーションを高めるため、放課後、部活動であるバドミントンの活動に参加し生徒とともに汗を流した。これによって生徒との距離が縮まり、オリジナル授業の際にも、生徒から活発な意見を引き出すことができた。

また小学校においても授業を見学することや、時には体育科の授業において指導の一部に加わることもあった。学級活動や清掃、給食など、学校全体で取り組む活動には積極的に関わるよう務めた。特に、年間行事である運動会に関しては予行練習を含め、フォークダンスや応援合戦を中心に行進や各競技の練習に参加した。また校長先生から悪石島の歴史や文化、生活について講話して頂いたり、実際に各地を案内して頂いたりしたことで、悪石島の魅力を改めて感じる事ができた。

地域の方々との交流においては、コミュニティ会館で行われた介護保険法の改正の説明会に参加した。悪石島の高齢化の実態とともに地域のつながりの強さを感じることができた。休日に催された地域のグラウンドゴルフ大会では準備のお手伝いを先生方や生徒とともにやり、プレーヤーや審判として関わった。その後開かれた敬老会では、地域の方々に混ざって一緒に踊り、各家庭で作った料理を持ち寄って始められた食事会にも参加させて頂き、夜遅くまで交流を深めた。

このように滞在期間中は、実習校における研修にとどまらず、(学校の枠を超えて)島で過ごした時間の全てが、私にとっての学びの活動とであった。



悪石島へ降り立った瞬間



グラウンドゴルフ大会



家庭料理の並ぶ食事会



敬老会の踊り

（２）研修を終えて

事前に、私自身が立てた「へき地教育は教育の原点だ」という仮説について、現地実習を経て、考えたことは次の通りである。

このような極めて特殊な教育環境を有効に活かすことができるかどうかは、実は教員の力量に懸かっており、これを活かそうとする教員の意欲があつてこそはじめて、そこに教育の原点としてのへき地教育の有用性が発生するということを感じた。つまり、極端な少人数ゆえに「個を大切にすること」が大規模校に比べて容易な環境にあることは間違いないが、個を大切にしようとする意思が教員の側に保たれ続けないと、その目的の達成は難しいということである。現地の教職員の子どもに対する熱心な教育姿勢にふれて、このことを強く感じた。

私は滞在期間中、「教員と教員の関係」「教員と児童生徒の関係」「児童生徒間の関係」「教師と地域との関係」「学校と地域との関係」という尺度を持って、実習校の様子や悪石島の教育環境を観察した。なかでも教員・学校と地域とのつながりの深さには、正直驚いた。相互の連携が当然のことのようになされている現実には、私は感銘を受けた。

悪石島の教員は、公私の別なく、いつも仕事をしているように私には映った。私は（本学附属小学校における一ヶ月間の）教育実習を経験しているものの、実際に学校現場に勤務した経験は無いので、一般的な教員の仕事量や内容については、わからないことが多い。それでもこれだけははっきりと言える。土曜日や日曜日も出勤してグラウンドの草刈りをしたり、地域の清掃活動などをしたりしている姿が、とても印象的であった。中学校の授業についても、担当授業は一つの教科だけではなく、多い教員は一人で3つの教科を掛け持ちしていた。さらに放課後も、中学三年生の生徒に対して夕方6時まで補習授業を行っていた。当然、島に学習塾は存在しない。しかし生徒は、鹿児島本土の生徒と同様に高校受験があり、テストで点数を取る必要がある。そのため、進路保障を期する教員の使命感と熱心さには頭が下がる思いであった。

私が理想とするべき教師像は、このような地域の実情に真正面から向き合って頑張る悪石島の教員の姿そのものかもしれない。教育の原点たる「へき地教育」に、体当たりで取り組んでいる教員の姿勢は、私にはとても学ぶことが多かった。

おわりに

この実習にあたって、いろいろな方にご配慮いただき、誠にありがたく思っている。

実習の始めから終わりまで、実習校の先生方には、私の事前の想像を超えて、非常に丁寧で、そして熱心にご指導を頂いた。時に厳しく感じた先生方のご指導は、「短期間の実習でも多くのことを吸収させて、大学に返してやりたい」という気持ちの表れであったと受け留めている。研修生として滞在している私にとって、非常にありがたいことであった。このような先生方の熱い思いを自分なりにいつも感じながら、実習生活を送っていた。

島外から派遣されている先生方は、島の社会に一所懸命に関わろうとしている姿は、私にはとても眩しく思えた。そのような先生方の姿に接して、私は今まで以上に「教師になりたい」という気持ちを確認することができた。仮に正規教員として離島に赴任した場合の自分の姿を、想像してみたりした。

最後に、本来は一緒に悪石島を訪れるはずだった、大学院の同級生である須谷哲章さんには、私が実習の準備に奔走している中、日常的に精神面でサポートをしてもらった。オリジナル授業で採用した姫路市の郷土資料を採すのに際して、一緒に現地を歩いてくれた。また同じコースに所属する大学院生で兵庫県小学校教諭の河本学さんには、個別具体的な教科指導のノウハウを教えて頂いた。リーダーの中井健博さんには、会の運営で常に負担をかけてしまい、本当に申し訳ない気持ちである。

時には議論が白熱し成員同士の意見がぶつかり合う事もあった。それでもこのサークル活動に参加して、同じ目標に向かってみんなで階段を昇れたことが、本当に楽しかった。みんなで積み上げていった「手作り感」は、何物にも代えがたい私の財産である。悪石島における実習の成果と共に、そこに臨むまでの過程において仲間と一緒に頑張れたことを、これからも誇りに思っていきたい。